

視覚研究グループもそうした研究のセンターであり、今後ともその研究会が研究者の自由に集い議論できる場であって欲しいと思う。結びに、有意義な研究会を企画さ

れた関係者の方々、および講演者の皆様に深く感謝いたします。

(1994年4月11日受理)

第27回光学五学会関西支部連合講演会参加報告

北川 洋一

兵庫県立工業技術センター 〒654 神戸市須磨区行平町 3-1-12

第27回光学五学会関西支部連合講演会が2月4日、大阪三田出版会の大会議室にて開催された。本講演会は日本光学会、照明学会関西支部、日本分光学会関西支部、日本色彩学会関西支部が主催する講演会で、今回のテーマは「光と色からみた環境の分析と設計」であり、71名の参加があった。内容としては、人間の感性に関連した内容が2件、光に関連した行政の話とリモートセンシングが各々1件と、多岐にわたったものであった。

最初の講演は、「地域の色環境と彩づくり」と題して日本カラーテクノロジー研究所の澤一寛氏により行われた。氏は自然環境、建築物を総合した地域の環境を色彩という観点からデザインするカラープランニングを行っている。現在の日本では、個々の建物を見た場合優れたデザインのものが増えているが、地域全体として見た場合の統一性に欠けており、ひいてはその地域の特色が薄れているという指摘があり、諸外国の都市と日本の都市、特に戦後発展した都市との景観の比較からその違いを述べられた。また、人間の目は、色によって見える範囲が異なるという特性を持っており、街づくりにおける色づかいもこの特性を考慮したものにすべきであるという提案が行われた。

2番目の講演は、東海大学情報技術センターの坂田俊文氏により「地球規模の環境計測」と題して行われた。最近、地球の温暖化、熱帯雨林の減少などの環境問題が注目を集めているが、人工衛星からのリモートセンシングによるこれらの計測の技術的な発展の歴史と今後の計画について解説された。従来は観測点のデータから2次元的な分布を推測していたのに対し、この手法を用いることにより地球表面の2次元データが直接得られることから、環境の変化を把握する精度が格段に向上してきていることを、事例としていくつかの地域のデータをもとに示されたが、その解像度の高さは、驚きであった。

3番目の講演は、岡山県小田郡美星町創星課の菊池和

孝氏により「美しい星空でまちづくり」と題して行われた。美星町は、岡山県の南西部吉備高原台地に位置しており、星を観測するための環境が良いことから、環境庁により“星空の町”に選定されている。これは、大気の状態が良いなどの要因もさることながら、その地域における光害をいかに減らすかが重要なポイントであり、美星町がこの問題にいかに対処しているかについて事例が紹介された。その中のいくつかを紹介すると、街灯には傘をつけて上空へは直接光が放射されないようにする、屋外照明は午後10時以降消灯する、果樹園などの防蛾灯は防蛾ネットに変更する、などであり、星が見えるという自然な状態ではごく当たり前のことを維持することの困難さを示された。

最後の講演は、東芝ライテック(株)研究所の村上幸三郎氏により「街のデザイン(色彩環境、景観照明)」と題して行われた。氏は京都の都市景観を研究している“街の色研究会・京都”の一員であり、そこで行われた研究の成果が2例紹介された。最初は、京都の街の色についてであった。京都の景観の色分布を分析した結果と、京都という街をイメージしたときの色はなにかというアンケートをもとに京都にふさわしい色を求め、それとは異なる色を持つ景観に対してコンピュータグラフィックスを用いて変更を行った場合の違いが示された。2番目に夜間照明について述べられた。これには、通行上の安全を確保するなどと言う一般的な問題もあるが、照明の効果による景観の違いが事例をふまえて示されると共に、清水寺と高台寺において実験的に行われた演出が紹介された。

この講演会は今回初めて参加したが、光という同じものを相手に仕事をしていても、ふだんは実験室内の光学素子ばかりを相手にしている著者にとっては、いずれも新鮮な内容で興味深かった。

(1994年4月19日受理)